

Anne ABEILLE
Les Nouvelles syntaxes

Armand Colin, 1993

三 藤 博

本書は、副題 « Grammaires d'unification et analyse du français » が示しているとおり、単一化 (unification) に方法的基礎を置く最近の統語理論のうち、代表的なものを取り上げて概観しているものである。本書で扱われているのは、語彙機能文法 (LFG)、一般化句構造文法 (GPSG)、GPSG が発展して成立した主辞駆動句構造文法 (HPSG)、及び Tree Adjoining Grammar (TAG) という4つの統語理論である。

これら4つの統語理論にそれぞれ1章を割り当てて概説しているのであるが、その前に40ページほどの序章があって、単一化文法の基本的な仕組みが大変簡潔に、しかも分かりやすく提示されている。また、おのおのの理論を解説した章においても、単に枠組みとしての理論を説明するだけにとどまるのではなくて、フランス語の諸構文がその理論でどのように分析されるのかが例示されている。ことに、著者が Tree Adjoining Grammar の専門家であることから (巻末の文献を見ると、1988年から1992年までの5年間に、単著で8編、著者が first author となっている共著が4編、合わせて12編もの論文を TAG の枠組みに基づいて発表されている)、TAG については特に詳細に、受け身文、非人称構文などの分析が与えられている。

背表紙に記載されている紹介によれば、著者 Anne Abeillé 氏は、1992年度の「ピエール・ラルース言語科学賞 (Prix Pierre Larousse pour les Sciences du Langage)」を受賞されたとのことである。新進気鋭の統語論学者として、彼女の今後の研究の進展が強く期待されるところである。なお余談ながら、評者は、1992年の3月末から長期在外研究員として10ヶ月間パリ第Ⅷ大学言語科学科に学ぶ機会があったが、その折に Abeillé 氏の研究発表を1度だけ伺ったことがあった。フランス語の動詞句の分析を取り上げられたその発表の時には、率直に言ってさほどの強い印象は受けなかったのであるが、日本に帰ってきてから本書を通読して、単一化文法の本格的な研究者であることを知り、少し驚いたような次第であった。

さて、この書評欄に本書を取り上げたのは、ここで単一化文法についての技術的な詳細を議論しようとしたためではないことは、改めて述べるまでもなからう。ここでは、本書の内容の詳細よりも、本書のような書物が、フランスの言語学関係者の間で広く読まれている Armand Colin 社の « Linguistique » シリーズの1巻として出版されたという、そのことを何よりもまず慶賀したかったのである。

20世紀もまもなく閉じようとする今 (と、いきなり大袈裟な身振りで恐縮であるが)、世界の

言語学は、また新たに大変刺激に富んだ激動期を迎えようとしている。言語学が、とりわけ理論言語学が、ごく近い将来に認知科学の中の1部門として位置づけられるであろう（あるいは、より強く、既にそのように位置づけられている）ことを疑う研究者は今では少ないと思われる。それも、単なる漠然とした展望や予感といったものではなくて、言語学の多様な理論そのものの動きの中から、認知科学との極めて密接な連携の道が必然的に明らかになりつつあるのである。

例えば、理論言語学の中でも最も華々しい分野とも言える統語論のフィールドを考えてみよう。そこでは、まず、今世紀後半の世界の言語学を一貫して先導してきた Noam Chomsky によって、彼自身の理論的枠組みの、おそらくは最後になると思われる大変革が極めて急速に進行している最中である。Minimalist Program の名で知られているこの新しい理論では、これまでも増して、人間の言語機能をにう計算（computation）の性質が正面から問題となってきた。Chomsky 自身による計算の問題の立て方には、不明確な部分も非常に多いのであるが、そのことがかえって、言語能力を規定する計算の複雑度の問題に研究者の興味を向かわせる結果となっている。次に、認知科学の分野でしばらく前に一世を風靡した「コネクショニスト・モデル」、「並列分散処理」の方法論を言語学に持ち込んだ Optimality 理論も、当初の音韻論の分野から広がって、現在では統語論においても様々な適用が試みられつつある。さらに、本書が概説している単一化文法の流れは、「制約に基づく文法」という極めて明確に規定された方向性が示されて、コンピューターによる自然言語処理への適用といった実用の面まで含めて、大いに発展しているところである。また、これらの多少とも「形式化された」アプローチに対して叛旗を翻して、言語の慣習としての性質、また比喩的な側面などを重視しつつ、説明の方法としては、直観的な、また図式的な理解を重んじる「認知言語学」と呼ばれる学派もその勢いを増しつつある。

このように見てきても、目ざましく発展している現在の理論言語学の成果とその真の意義を正當に把握するためには、認知科学や、さらにその認知科学の基礎を支えている形式論理学や計量理論などの基本的な点に関する理解が不可欠であることが分かる。現に、理論言語学の部門が、「認知・情報科学科」といった名称の学科の中に置かれることは、英語圏の諸国の大学や、ドイツ、オランダ、北欧諸国の大学では、珍しくない、といった域を既に超えて、むしろ当たり前のことになりつつあるといつてよい。また日本でも、日本認知科学会その他を中心として、理論言語学者とコンピューター、情報処理諸分野の研究者との交流は活発に行われている（もちろん、これは日本では現状で充分である、という意味ではなく、よりいっそう活発な交流が是非とも望まれることは言うまでもない）。

こうした状況にひき比べて、この情報科学・認知科学との交流が著しくたち遅れていると感じられるのが、フランスの言語学界ではないだろうか。いうまでもなく、評者は、フランスの理論言語学をその全体にわたって把握しているわけでは全くないので、このことはあくまでも、一私見として受け取って頂きたいのであるが、少なくとも評者の目には、フランスの言語学界は、今まさに我々の眼前に展開されている世界の理論言語学の極めて激しく、そしてエキサイティングな発展の現場に立ち会っているようには感じられないのである。何か、もはやフランスただ一国の中でしか通用しない「伝統」の中で、小さくなっているように思われてならないのである。近

年では、フランス語を対象とした興味深い論文にしても、フランスから以上に、アメリカ、ベルギー、スイス、カナダ、オランダ、日本などから多く現れている、といってもおそらく過言ではないであろう。

通時的な研究や社会言語学的な研究、また方言研究といった分野は別として、今現在、言語に関して、統語論であれ、意味論・語用論であれ、また音韻論であれ、およそ理論的な分析を企てる研究者が、世界のどこに居住して自分の母語が何語であるにしても、英語圏、とりわけアメリカでの理論言語学の研究成果を無視して研究を続けていく、というようなことはもはや不可能である。もちろん、ある程度の数の研究者の集団さえあれば、その集団内部でのみ通用する何らかの教義に基づいて「研究」を遂行していくことは常に可能である。しかし、そのような「研究」には、少数の当該集団のメンバー以外には大きな価値はない、と感じるのは、おそらく評者一人ではないはずである。

こうした観点から見てくる時、本書のように、「制約に基づく文法」の基本的なメカニズムを簡明に概説した書物が、比較的入手しやすいシリーズの1巻として収められたことの意義が改めて明らかになろう。言語科学の賞を受賞した著者の今後の活躍によって、単一化文法のスクールがフランスにも根づき、大きく発展していくことを心から願わずにはいられない。

そして、単一化文法だけではなく、Minimalist Program にせよ、Optimality 理論にせよ、「認知言語学」にせよ、また本評では触れられなかった意味論・語用論の分野の様々なアプローチにせよ、そのいずれもフランスに定着して、その間で活発な議論が展開される日の訪れることを切に願ってやまない。